
コトバノハカバ

黒い男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コトバノハカバ

【Nコード】

N6045E

【作者名】

黒い男

【あらすじ】

どこまでも続く深い森の中…俺が出会ったのは白いワンピースの少女。少女は微笑みながら俺に言う「あなたにコトバはいらないんでしょう？」言葉とは、誰かに思いを伝える事とは？そして、俺に残された最後の希望、それは…

「ここは…何処だ？」

俺の眩きは、目の前に鬱蒼と広がる木々に吸い込まれ、誰に届くことも無く消えて行つた。

俺は何故こんなところを歩いているんだ…

目に映るのは何処までもどこまでも続く深い森、それすらも深い霧に阻まれ、ほんの数歩先までしか見えない。

じつとりと張り付いたシャツの襟をいくら広げても、心地よい風など入ってはこない。

今は夏なのか？…それとも冬？

もうどれくらいこうして歩いているんだ…？

三時間か？

…いや、三日？

…それとも三年？

だめだ…感覚が完全に麻痺している…

そもそも何をしようとこんな森の中に入ったんだ？何処へ向かっていたんだ？

…いや、何かから逃げていたのか？

何処へ？何を？何から？何故？

同じ言葉が俺の頭の中で呪文のように繰り返す。

…何も解らない…

俺は狂いそうになる…いや、すでに狂っているのか？

本当に狂っている人間は、自分が狂っていると気付くのだろうか？

そんな事を冷静に考える自分が確かにいる。

冷静に考える…そうだ、冷静になるんだ。

まず、今分かっているのは、自分が何処に居るのかまったく分から

ないという事。

目の前に広がるのは、無限とも思える森。そして深い霧…

なんだ、分からない事だらけじゃないか…

いや、分からない事が分かった…

後はそれについてどう対処するかだ。

どうやら俺は、少しだけ正気を取り戻すことが出来たようだ…

まずは場所だ。

これを知る方法は…今の所思いつかない。

空には星も出ていないし、かといって太陽や月も出ていない。

たとえ俺の頭上に満天の星空が広がっていたとしても、俺は冒険小説の主人公じゃない。

星の位置で方角を知る術など持ち合わせてはいるはずもなかったが。

目の前に漂う霧と同じ、重苦しい雲が太陽の光さえ遮っているのか…
それとも、ここには星や太陽すら存在しないのか？

いったい今は何時なんだ？

もうかなりの時間歩き続けているように思うが、あたりが暗くなることも、今以上に明るくなることもなかった。

この森には時間の流れすら存在しないのか。

時間を知る方法、それは普段なら当たり前に出来る事だ。

時計を見ればいい。

しかし、俺の手首には腕時計など無かった。

携帯電話を持つようになってから、腕時計自体しなくなったな。

以前は死んだ親父にもらった時計をいつもしていたのに。

…さてよ？携帯電話…そうだ、携帯があれば時間も分かるし、それどころか救助も呼べる…

俺はどうやら本当に狂っていたようだ…こんな簡単な事にも気が付かないなんて。

俺は自分の愚かさを少しだけ笑った。

こんな山の中で携帯が使えるとは限らないが。

俺はズボンのポケットを弄った…何も無い。

シャツの胸も同じように弄る…何も無い。

何度目かの絶望が俺を襲う。

しかし、もう狂って壊れるような心は俺には無いらしい…

俺はそのまま地面に倒れこんだ。

しつとりと濡れた草木の水分が服に染みてくるのが分かる。

まだ生きているのは、こんな絶望を感じるためなのか？

もう、絶望を絶望と感しない。

あるのは冷静にそこにある孤独と死。

奇妙なものだ…

知らなかった…諦めがこんなにも心地よい事だとは。

俺は目をつぶると、嫌になるほど見てきた森の景色に別れが告げられるような気がした。

真っ暗な世界。

何も無いのは今までと同じだが、そこには本当に何も無い。

この森には鳥の囀りすらなかった。

本当に静かだ…

このまま死ぬるなら、案外楽でいいかも知れない。

一人で死ぬのはやはり少し寂しいが…

…このまま自分の思考そのものが止まり、完全なる無の世界に旅立てる…

そう思った時だった。

何処かで音楽が聞こえる…

どんな曲かは分からないが、確かに一定の旋律を持った音。

携帯電話の着信音のような、電気的な音だ…

「…誰か…居るのか？」

さっきまで死ぬ事に何のためらいも無かった俺が、それでも生きると言う事にまだ未練があったようだ。

目を開ける…そこにはやはりどんよりとした霧。

俺は近くの木にもたれかかると、なんとか上体を持ち上げる。

あたりには何も無い。

しかし、あれは明らかに人工的な旋律だ。

俺は目をつぶり、かすかに聴こえる電子音に神経を集中した…

「…こつちか…？」

音は俺の横たわるすぐ傍で聞こえてくるようだ。

俺はたまらず駆け出していた。

何処にこんな体力が残っていたのか？

これが生きるということに対する執着なのか。

それとも、生物としての本能なのか。

俺がかすかな電子音を頼りに急斜面を駆け下りと、その途端電子音は途切れた。

しかし、電子音はもう必要ない。

そこに現れたのは、虹色の丘。

様々な色の無数の携帯電話が、半分湖に浸かって丘のように見える。

「なんだ…これ…」

俺は目の前に広がる異常な光景に、またしても疑問の言葉を呟く。

携帯電話の墓場…いや、そんな上等な物じゃない。

何処かの産廃業者が放置したのだろうか？

それにしても凄い数だ。

千や二千なんてもんじゃない。

その携帯の一つが、着信を知らせるメロディとともにカラフルなランプを点滅させる。

「生きてる携帯があるのか!？」

一縷の希望に胸が高鳴った。

俺は携帯で出来た虹色の丘を駆け上る。

もし本当に着信を知らせているのなら、こんな山の中でも携帯が使えると言う事だ。

それに何より、その携帯でつながっている相手が電話の先に必ずいる。

俺は助かる!

俺は一人じゃない!

俺はまだ死ななくていいんだ!

ほんの数秒に俺の頭の中は希望であふれる。

音と光で着信を知らせている携帯に手を伸ばし、希望をつかもうとしたその瞬間。

…携帯は、さっきまでの賑やかな自己主張をやめた。

まるで、俺が触れるのを拒絶するかのように…

そんなはずはない…電話に出ようと受話器を手に取り、しかしその瞬間、鳴らない電話…

よくある事さ…ただの偶然。

解つていても、今の俺には世界の全てに拒絶されたような錯覚を覚えさせる。

いや、かかってきた電話にどれほどの意味がある？

こちらからかければいいじゃないか！

携帯が使えるのは間違いない。

俺はその携帯を手にとると、ボタンを押した。

こんな時は何処にかければいい？

俺のアパートにはもう誰も居ない。

友人か？いや警察？救急？

俺は少々混乱していたかもしれない。

しかし、今度の混乱は死と隣り合わせの混乱じゃない。

どこでもいいんだ。

いや、だれでもいい。

俺がここに居る。

それが誰かに伝わればいい。

…しかし、携帯の液晶画面にはなににも映ってない。

電源が切れたのか？

ボタンをいくら押してもなんの反応も無い。

そんな事があるのか！？

つい先ほどまで、あんなにはっきり聴こえていたはずの着信メロディ。

それすらも俺の妄想、幻だったのか？

よく見れば、液晶画面にはヒビが入っていて、その中には水が溜まっている。

俺は辺りに散乱する無数の携帯電話を拾い上げると、次から次に電源を確認していった。

まともに動きそうな携帯電話など一つもない。

どうやら俺は本当に狂ってしまったらしい…

電源どころか、バッテリーすら入っていない物もある…皆どこかが壊れ、水に浸かって既にその機能を停止していた。

…俺も同じなのか…？

そう思うと、体中の力が抜けた…

俺は携帯の丘に背中から倒れると、そのまま丘の斜面を十メートルほど滑り落ちた。

ガラガラと崩れる携帯電話の丘。

俺はそのまま湖面に落ち、立ち上がる事も出来なかった。

今度こそだめだ…

最早、体を濡らす水の感覚さえ、曖昧な情報としてしか認識できなかった。

「…そんなところで寝てると風邪をひくよ…」

今度は少女の声が聞こえる。

人が生きるか死ぬかの時に、
「風邪をひく」とは、なんともあり
がたい忠告だ。

「また、幻か…」

俺は呟いていた。

「幻？…私は、あなたの幻だったの？…なんだか素敵ね」

俺はぼんやりと声のする方へ視線を向けた。

そこには何処か悪戯っぽい微笑みを浮かべた少女が立っていた。

俺が仰向けになっているので、少女は上下逆さまになっている。

まだ十四、五歳の少女だろうか…死の間際に見る幻にしちゃ、幼
い幻だな…。

「どうせなら、もっといい女が良かったな…」

俺もつすら笑いを浮かべていた。

「失礼ねえ…せっかく助けてあげようかと思ったのに」

…助かる？…これは幻じゃないのか！？

「しっかりしてよ、このくらいの事で」

…このくらい？…俺の何が分かるっていうんだ…

それとも俺の事を知っているのか？

そんな筈は無い…でも、この少女何処かで会ったことがあるような…

「ほら、立って」

少女は俺のすぐ前に来ると、俺の手を引っ張った。

俺の手の感覚が麻痺しているのか、少女の体温は全く感じられない。
い。

俺はどうか立ち上がると、しばらく少女の瞳を見つめていた。

「どうしたの？」

少女は俺の瞳を覗き返す。

俺は少女のその少女らしからぬ、いや、少女らしい振る舞いに急に恥ずかしくなり、少女の手を離す。

「ごめん…いや、ありがとう…助かったよ」

こんな歳の少女が一人で山奥にいる訳が無い、それは、少女の格好を見ても明らかだ。

少女は薄手の白いワンピース姿で、よく見ると、靴も履いていない。

どう見ても登山に出かけるような格好ではない。

行楽か何かでこの森に入ったのだろうか。

何にせよ、家族が引率の大人がいるはずだ。

「お父さんか、お母さんは、近くににいるのか？」

しかし、少女はさっきの悪戯っぽい笑みを浮かべるだけ。

「…綺麗ね…これ」

俺の質問には応えずに、少女の瞳には携帯電話で出来た虹色の丘が映っていた。

綺麗といえば、確かにそうかもしれない。

最近の携帯電話は本当にカラフルだ。

赤や青、メタリックに蛍光色。

カラフルに染められたその小箱の集合体は、まるで教会のステンドグラスのようにも見えた。

様々な人と人の言葉や想いを伝え、しかし、今はその使命を終えて、墓標すら無いただの塵の山。

「携帯の墓場か、ここは」

俺は少女に訊いたわけではないが、この奇妙な光景を口にした。

「…あなたには、これが携帯電話に見えるのね…」

もつと違う表現をすればいいってのか？

しかし、今の俺には情緒的に状況を表現する余裕など無かった。

一刻も早く、この異常な空間から逃げ出したかった俺は、少女の話を適当に切り上げたかった。

「なあ、君の外に誰か大人は居ないのか？」

苛立ちの為か、語気が荒くなるのを俺は気を付けながら少女に尋ねた。

「…いないわ…」

少女はぼつんと呟くだけだった。

「…じゃあ、君は何処から来たんだ？」

少女の瞳に俺の顔が映っている。

「何処から？…ずっと、あなたのそばに居たじゃない…」

最近の子供は、大人の事をからかってそんなに楽しいのか？

俺にはこの少女の言う言葉の意味が理解できないでいた。

「なあ！頼むから、ちゃんと…」

その時、突然俺の背後の携帯が鳴り出す。

俺は振り返った。

まだ俺は幻を見ているのか…だとすると、この少女も俺の狂った脳が描き出した幻なのか？

俺の思考は、また嫌な想像に囚われる。

「出てみたら？」

少女は俺に微笑みながら携帯を指差す。

この少女にも、携帯の着信メロディは聴こえているらしい。

それは、この少女が幻でないという事なのか、それとも、全てが幻という証拠なのか…

俺の耳に聞こえるこのメロディは、何も教えてくれない。

「どうしたの？…また切れちゃうわよ…」

…また？…俺が携帯に出ようとしていた時から見ていたのか？

もう確かな物など何も無かった…

幻かどうか、確かめられる術など何もない。

俺に出来るのは、今も鳴り続ける携帯に出る事。

俺は、七色の丘の中ほどで鳴り続ける携帯電話を手取る。

俺は鼓動が早くなるのを感じた。

やけに軽いその携帯電話には、やはりバッテリーが無かった…

俺は目をつぶると、携帯の通話ボタンを押した…

『…アイタイ…アイタイ…アイタイ…』

若い男の声…

壊れたレコードプレーヤーのように、何度も繰り返すその言葉は、何処か悲しそうだ。

「何がきこえたの？」

俺は少女の方を振り返った。

「……」

何と言っているのか分らない。

俺が言葉をさがしていると、足元でもう一つの携帯電話が鳴り出した。

また少し、俺の鼓動は早くなる。

「フツツ…またかかってきたみたい…」

少女は嬉しそうに微笑む。

それは俺に携帯電話に出る事を強要しているように見えた。

俺は少女の視線に逆らえない。

『アイシテル…アイシテル…アイシテル…』

今度は女性の声だ…

俺は携帯電話をそっと置いた。

「何なんだ？…これは…」

誰に問いかける訳でもない…俺は呟いた。

そんな俺の姿を、少女は楽しそうに見ていた。

また他の携帯電話が鳴り出す。

俺は携帯電話に出る。

『…コロシテヤル！…コロシテヤル！…コロシテヤル！』

「…うわあ…！」

その、あまりに恐ろしい唸りのような言葉に、俺は携帯電話を放り出した。

「アハハハハ！」

少女はこころと笑っている。

「何なんだよ！！…ここは…！」

俺は少女に怒鳴っていた。

全てがこの少女の悪戯なのか！？

ここに迷い込んだ奴をからかって楽しんでるのか！？

「おしえてほしい？」

…いつそ悪戯であってほしい、全部嘘だと言ってほしい…

しかし、少女の表情は今までとは違い、とても冷たく感じられる。

「……」

俺はまた言葉を失う…

本当に、この少女は『少女』なのか？

こんな表現で、うまく伝わるだろうか。

俺の目に映るのは、確かにまだ14、5歳の少女だ…

だが、俺には時折この少女がみせる全てを見透かしたような目に不安を感じていた。

「…ここはね…コトバノハカバなの…」

少女はまた奇妙な言葉を口にする。

「言えなかったコトバ…言わなかったコトバ…それが集まって出来

た…コトバノハカバ…」

俺には到底理解出来なかった…いや、本当は理解したくないだけかもしれない。

「ここに集まってくるコトバは、伝えられなかった、伝えなかった、伝わらなかった言葉たち…それはなにも、愛や優しさに溢れたコトバだけじゃない…」

さっきの唸るような声は、恨みのコトバだって事か…。

「この子たちは、ここに集まって、誰に伝わる事も無く、こうしてずっと泣いているの…」

少女の瞳に、その時はじめて悲しげな色が見えたような気がした。

コトバノハカバだって？…そんな事、信じられる訳が無い…

「まさか…これは、ただの携帯電話だ…ただの塵捨て場だ！」

そう叫ぶ俺を、少女はただ見つめていた。

哀れな子供を見守る母のように…

「…そう…あなたには、この子たちが携帯電話に見えるんだったわね…」

俺がおかしいのか？…それとも、この少女がおかしいのか…

全てが解らなくなってきた…

「どういう意味だ!」

俺は少女の元に駆け降りると、そのか細い肩に掴みかかった。

「…コトバは目に見えないでしょう?…活字や文章なんて、所詮まがい物。コトバは、その口蓋からひとたび外に出てしまえば、しゃぼん玉のように、マッチの炎のように、雪の結晶のように…消えてなくなる…でも、だから此処では、その人が一番イメージしやすい形でコトバが見えるの…あなたには携帯電話に見えているだけ…」

…そんな事、あるはずが無い…

「嘘だ!…こんな塵に、何の意味も無い!」

俺は叫んでいた。

何故叫ばなければならなかったのか、俺にもわからない…

…俺は恐怖していた…

「じゃあ、これも塵なのね?」

少女は俺の顔の前で一台の携帯電話をゆらゆらと揺らしている。

メタリックブラックのその携帯電話は、俺が失くした携帯電話に

そっくりだった。

「…それは…」

…俺は恐怖していた…

「何かしらね？…さっき、そこで拾ったの」

俺の携帯電話だっていうのか？

少女は俺の手から逃れるようにくりと踵を返すと、携帯電話のストラップを持ってくるくと回した。

…俺は恐怖していた…

「あれ？メールが入ってる？…えーと…」

「やめろ！…」

俺の携帯だとすると、そのメールは、俺の最も見たくないものだ。

しかし、少女一瞬悲しそうな顔を見ると、無慈悲にそのメールを声に出した。

「…さよなら…だって…」

間違い無い、それは俺の携帯だ…

『さよなら』…それは、瑞樹が俺に送った最後のメール。

瑞樹とは、高校の時から付き合いで、俺の仕事が安定してから、俺のアパートで同棲するようになっていた。

もう十年近い付き合いだったし、いちいち好きとか嫌いとか言うような関係じゃないと思っていた…少なくとも、俺は…

ある日、俺は瑞樹とつまらない事でケンカをした。

悪いのは俺だ…いつも俺の勝手に、瑞樹を悲しませていた。

その日も、瑞樹と前から行く約束をしていた映画に、急にいけなくなっ

急な仕事が入ったんだ…それも、当日の朝にだ。

俺は瑞樹に謝った…つもりだ…。

「…ごめん、仕事が入った…」

そりゃあ瑞樹は怒ったさ、でも、いつもの事だと思ってた。

いつもの事…急な仕事…俺の歳で瑞樹と二人生活していくのは思
ったより大変な事で、俺は無我夢中で働いた。

自分も仕事をするという瑞樹を止めたのは、俺のつまらない束縛
に他ならなかった。

本当は、瑞樹の事を誰より大切に思っていたのに、いつも俺が振
り返ると、そこに瑞樹が居た…

それが当たり前の事だと思っていたんだ。

その当たり前が俺の単なる思い込みと、甘えだと気が付いたのは、
仕事から帰って来て、しばらく経ってからの事だった。

夜の九時過ぎにアパートに戻った俺は、まず、部屋の明かりがつ
いていない事に気が付いた。

いつもなら俺が帰ってくる頃には、台所で料理を作って待ってい
てくれる瑞樹がいない。

これは相当怒ったのかとも思ったが、どうせ友達の所にでも遊び
に行ってるのだろうと、俺は待つ事にした。

しかし、瑞樹は帰ってこなかった。

俺が本当に慌てたのは、次の日の朝だった。

一晩中瑞樹を待った俺は、いつの間にか眠っていた。

朝になっても帰ってこない瑞樹に、連絡を取ろうと俺は携帯を開いた。

…いつの間にか、携帯にメールが入っていた。

俺が眠っていた間か、それとも、着信に気が付かなかったのか、瑞樹からの、一通のメール。

『さよなら』

俺は目の前が真っ暗になるのを感じた。

…情けないと思うだろう？

ずっと一緒にいたんだ。

当たり前のように…

それが、突然自分の半身を失うような感覚。

たかが一晚帰ってこなかったくらい、たいしたこと無いって？

そりゃ、俺もそう思ったさ。

だから俺は待った。

瑞樹が居なくなってから、二日が過ぎ、三日が過ぎ…あつと言つ間に一週間が過ぎた。

瑞樹は帰ってこなかった…

カレンダーを見て、俺はやつと気が付いた。

瑞樹と映画を見に行くと約束していたあの日。

その日は、瑞樹の25回目の誕生日だったんだ…

どこまで俺は馬鹿なのか。

…俺は本当に後悔した…

「お前が25歳になるまでには、ちゃんと結婚しような…」

一緒に暮らし始めたころ、俺が言った、なんとも情けないプロポーズの言葉。

それでも、瑞樹は黙って頷き、静かに泣いた…

…俺は本当に後悔した…

俺は、慌てて瑞樹の携帯に電話をかけた。

…つながらない。

瑞樹の友達の家や、瑞樹が立ち寄りそうな所。

しかし、瑞樹の行方はつかめなかった。

仕方なく瑞樹の実家に電話すると、瑞樹の母が言いにくそうに、瑞樹の帰郷を教えてくださいました。

瑞樹は電話にも出たがらず、自分がここに居る事も教えないようにと言ったきり、自分の部屋に籠ったままだという。

俺は仕事も休んで、車で4時間ほどかかる瑞樹の実家に向かった。

山道を飛ばして…。

…それから…どうなったんだ？

…思い出せない…

…あの後…俺は瑞樹に逢えたのだろうか…？

逢って、俺は瑞樹になんと言ったのだろうか…？

…思い出せない…

…俺は恐怖していた…

目の前に居る少女は、いったい何を知っているんだ？

少女の瞳は、冷たい光を宿したまま、瞬き一つせずに俺を突き刺す。

「どうしたの？…そんな怖い顔して…」

少女は俺をからかうように言う。

少女の白くか細い手には、俺の携帯が揺れていた。

「…それは、俺の携帯だ！」

俺は手を伸ばすと、少女から携帯を奪い取ろうとした。

…しかし、俺の腕は、空しく空を切る。

少女の姿はそこには無かった。

俺は慌てて辺りを見渡す。

「どうしたの？…こっちよ、こっち…」

少女の声は俺の背後から聞こえる。

俺は振り返った。

虹色の丘の上、少女はいつの間にかそこに立っていた。

「返してくれ！…それは、俺の大切なものなんだ！！」

俺は叫んでいた…まるで、悲鳴にも似た声で…

「これがほしいの？」

少女の声が俺の耳の側でささやくように聞こえる。

同時に、俺の視界の端で揺れる携帯電話が見えた。

俺は振り返る。

確かに俺の顔の直ぐ側で携帯電話が揺れている。

俺は携帯に手を伸ばす。

しかし、すんでの所で携帯は俺の手をすり抜けるように消えていた。

「どこを見てるの？」

俺は少女の方を振り返る。

少女はやはり七色の丘の上で微笑んでいる。

「何なんだ！？…俺がいったい何をしたっていうんだよ！！」

俺は跪いて少女に縋った。

「…あなたにコトバは要らないんでしょう？」

俺と瑞樹の事を言ってるのか？…俺にコトバが要らないって？

そんな事は無い、今の俺に残されている最後の希望は、コトバ以外には無いというのに。

俺にコトバが足りなかったのは認める。ほんの一言のコトバが足りなかったせいで、俺は何物にも変えがたい大切なものを失おうとしている…。

それを取り戻そうとしたとき、やはり頼れるのはコトバだけ…。

もう、俺にはそのコトバすら残されていないというのか…。

「頼むよ…俺のコトバを…コトバを返してくれ…」

俺は心の底から懇願していた…

たとえば、俺のコトバで瑞樹が帰ってこなくてもいい…

コトバを伝えられない事の方が、何倍も苦しく辛い事だ…

たった一言でいい、もう一度…もう一度瑞樹に…

「……そう…」

少女は目を閉じ、俺の携帯をその胸に抱く。

俺も目を閉じ、深く頭を垂れた。最後の審判を待つ罪人のように…。

その時、俺の携帯が着信を知らせるメロディを奏でた。

俺は顔を上げ、虹色の丘を見上げた。

そこに少女の姿は無かった。

俺の携帯は、すでに俺の手の中にある。

俺は赦されたのだろうか…？

俺はそっと携帯の通話ボタンを押した。

あの少女の声が聞こえたような気がする…。

「よかったわね…」

俺が目覚めたのは、山道の脇の、針葉樹の林の中だった。

瑞樹の実家に向かって車をとばしていた俺は、山道で事故を起こし、車から自力で這い出して、この林の中で気を失っていたらしい…

そこに、虹色の丘なんて無かった。

つまり、俺が見たのは全て幻だったという事になるのだろうか？

しかし、俺の手には、やはり携帯が握られていた。

「…つつ！…」

体を起こすと、背中に鈍い痛みが走った。

「夢だったのか…」

俺は近くの針葉樹にその体を横たえたと、携帯の液晶を覗いた。

こんな山奥だというのに、圏外の文字は出ていない。

俺は静かに短縮ダイヤルのボタンを押す。

「……」

コールしている。

…1回、2回、3回…

…相手は出ない…

…4回、5回、6回…

頼む…出してくれ…

コールが10回を過ぎた時だ。

「…もしもし…」

聴きなれた声…しかし、その声を聞くのはもう数年ぶりのようにも思えた。

俺は伝えたかったコトバを口にする…

「…愛してる…」

横たわる俺の側で、少女の白いワンピースが風に揺れていた。

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6045e/>

コトバノハカバ

2011年1月8日02時12分発行